

母子同室制に関する褥婦の意識調査 ～母子同室制の観点から母乳率上昇をめざして～

芳 賀 深 雪

はじめに

母子同室制は、身体復古、母性意識の構築、育児行動の確立、母乳率の上昇等、様々な側面において有効性が高いことが示されている¹⁻³⁾。当院でも WHO/UNCEF の指針⁴⁾に基づき 2005 年より母子同室制を取り入れており、正常分娩であれば出生直後から、帝王切開後であれば出生 1 日目の歩行開始後から母子同室を開始している。

母子同室制は外来の掲示や母親学級第 4 課で説明しており、詳細はテキストに記載され明確化している。一方で母親学級の受講が必須化されていないことや、テキストを熟読していない妊婦も多数おり、当院が母子同室制を行っているとは妊婦全員が把握しているとは考えにくい。現に、前年度の母乳率上昇における研究⁵⁾において母子同室制を実施し「常に一緒に居て、育児のあり方がよくわかった」という意見があった半面、「母乳についてこんなに頑張っている病院とは知らなかった」「母子同室は希望に応じてほしかった」という意見があった。児が生理的体重減少にある日数に至っては母子同室を特に「辛い」と感じる褥婦も少なからずいる。その都度、母子同室制の意義を説明しているが、表情が冴えない褥婦も見受けられる。また、当院においては主に母乳育児を支援するために母子同室制を取り入れた節があるが、その他の母子同室制のメリットを把握しているのかを知りたいと思った。

今回、母子同室制という病棟の母乳育児支援の柱を多くの母親はどのように認識しているのか把握することを目的とし、当院で出産した褥婦がど

のように感じながら入院生活を送っているかを知ること、現在行われている看護支援体制を見直し、結果として今後病棟の母乳率の上昇に繋がっていくのではないかと考え研究を行うこととした。

研究目的

1. 当院が母子同室制を行っているという事実が把握されているのか調査する。
2. 母子同室制から得られるメリットを把握している褥婦は母子同室制に対してよいイメージを抱き、母乳育児が円滑に進む可能性を調査する。
3. 現在提供している母乳育児支援に満足が得られているのか調査する。
4. 母子同室制は母性意識を助長し、母乳率上昇に有効であるのか検討する。

研究対象および方法

1. 研究期間

2009 年 7 月 18 日～8 月 23 日

2. 調査対象

仙台市立病院において上記期間に出生した初・経産婦 68 名対象。但し母子異室を指示された小児科入院児は対象外とした。

3. 調査方法

産後 2 日目と 6 日目 (5 日目退院の人は 5 日目) に独自に作成した無記名のアンケートを依頼・配布し、周産部病棟内に設置したアンケート回収ボックスに提出とした。一部情報は、カルテより用いた。

4. 分析方法

アンケート内容について excel を用いて単純集計、T 検定を行った。

5. 倫理的配慮

研究対象者には書面と口頭で研究主旨・方法・内容を説明の上、同意を得たものを対象とした。アンケート等の照合のための氏名はデータ入力時に削除するものとし、プライバシーの保護に努め、個人が特定されることのないように配慮した。

6. 用語の定義

母子同室制：24時間児と共に過ごせる環境にいること。

母乳率：ミルクを全く追加していない直接母乳群もしくは搾乳追加群の比率を示す。

結 果

同意を得てアンケートを配布した68部のうち、回収は61部（回収率89.7%）であり、回収したアンケートのうち有効回答は55部（有効回答率80.9%）であった。

1. 属性

アンケート回答者の初産婦・経産婦の内訳は初産婦28名（平均年齢30.9歳）、経産婦27名（平均年齢31.5歳）、全体では55名（平均年齢31.2歳）であった。

妊娠中、母親学級を受講した褥婦は41名（74.5%）、受講しなかった褥婦は14名（25.5%）であった。

2. 母子同室制の認知度

母子同室制について妊娠中から知っていた褥婦は52名（94.5%）、知らなかった褥婦は3名（5.5%）であった。（図1）

3. 母子同室制の認知場所

母子同室制を認知した場所は外来受診時の掲示（26名）、母親学級（20名）、友人・知人（15名）、その他インターネット・口コミサイト等（11名）の順に高かった（複数回答可）。（図2）

母親学級を受講しなかった14名はいずれも母子同室制であることは知っていた。14名のうち13名は経産婦であり、前回出産時や外来受診の掲示、友人・知人、インターネットサイトから母子同室制である情報を得ていた。1名は初産婦で

母子同室制の認知度

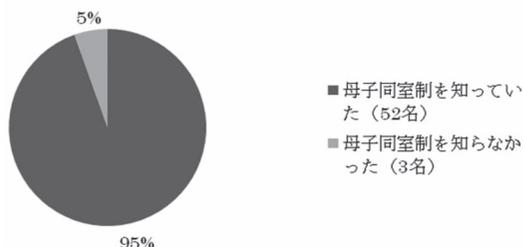


図1.

母子同室制の認知場所 (複数回答可)

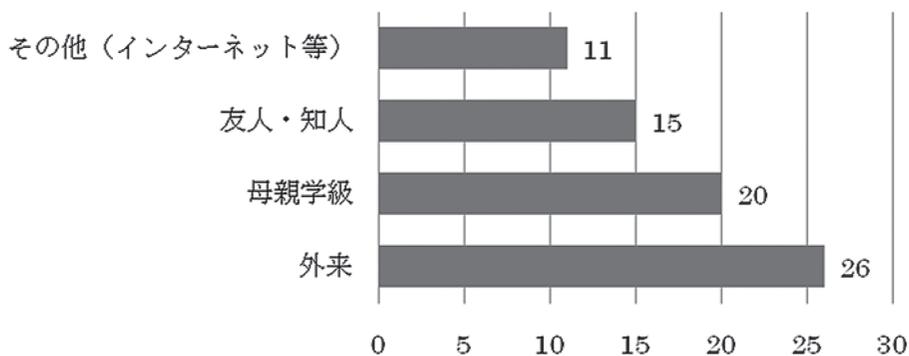


図2.

あり、当院で出産した友人より母子同室制であると聞いていた。一方で母子同室制を知らないと答えた前述の3名の褥婦はいずれも母親学級を受講していた。

4. 母子同室制のメリットの認知

大半の褥婦は母子同室制のメリットを1つ以上知っており、全く知らないと答えた褥婦は1名(1.8%)であった。メリットを知らない褥婦は母子同室制に対して「よい」と思っており、退院時の授乳状況は母乳のみであった。メリットを知ることによって母子同室制に対して前向きになるという項目においてT検定をかけたが、数値は現れなかった。

知っているメリットの上位2項目は「母乳の分泌がよくなる」「赤ちゃんのサインがよくわかる」であった。(図3)

5. 母子同室制の辛いと感じる点

妊娠中にイメージしていた母子同室制と同じと回答した褥婦は44名(80%)、違うと回答した褥婦は11名(20%)であった。「すごくよい」と回答した褥婦は2名(3.6%)で、「よい」と回答した褥婦は5名(9%)、「思っていたより悪い」と回答した褥婦は4名(7.3%)であった。

産褥2日目の時点において、母子同室制を「思っ

ていたより悪い」と判断した褥婦4名は「疲れが取れない」「自分が眠れない」「授乳回数が多い」「その他(混合希望だった、初日は異室がよかった、食事はゆっくり取りたい)等」の点において辛いと感じていた。(図4)4名のうち2名は母乳のみ、残る2名は母乳のほかに糖水を追加していた。

6. 授乳希望の変化

妊娠中は55名中43名(78.2%)が母乳育児希望であったが、母子同室制を経験した結果41名(74.5%)が母乳育児を希望し、2名(3.8%)が混合栄養希望に変化した。妊娠中2名(3.6%)がミルク希望だったが1名(1.8%)が母乳育児希望、1名(1.8%)が混合栄養希望へと変化した。一方で、10名(18.2%)は混合栄養希望だったが、5名(9%)が母乳育児希望へ、1名(1.8%)がミルク希望へ変わり、4名(7.3%)はそのまま混合栄養希望であった。(図5)母乳希望から混合希望に変化した褥婦、混合希望からミルク希望に変化した褥婦は、2日目の時点において糖水を追加している状態であった。

7. スタッフの支援に対する満足度

産褥2日目におけるスタッフの支援に満足・おおよそ満足であると感じている褥婦は52名(94.5%)、普通・不満足と感じている褥婦は3名

母子同室制のメリットの認知 (複数回答可)

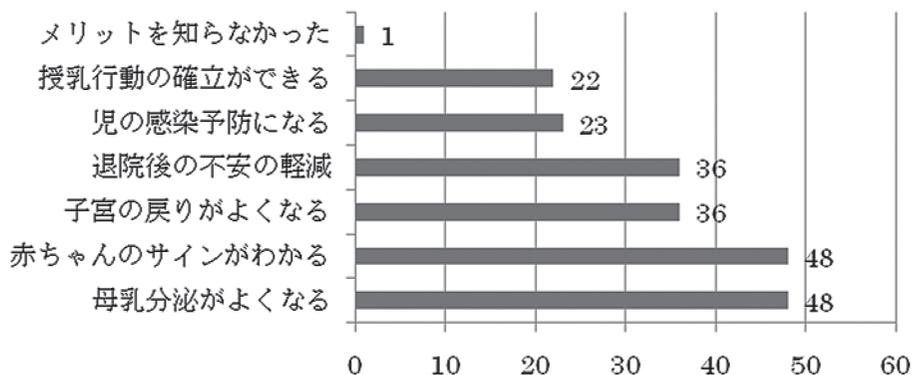


図3.

母子同室の辛いと感じる点 (複数回答可)

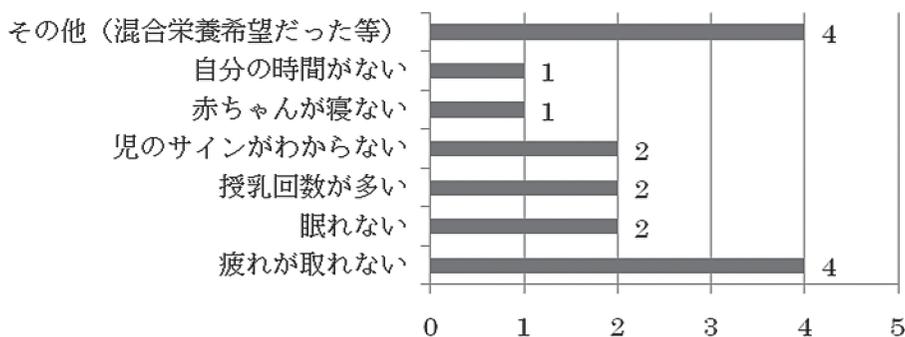


図 4.

授乳希望の変化

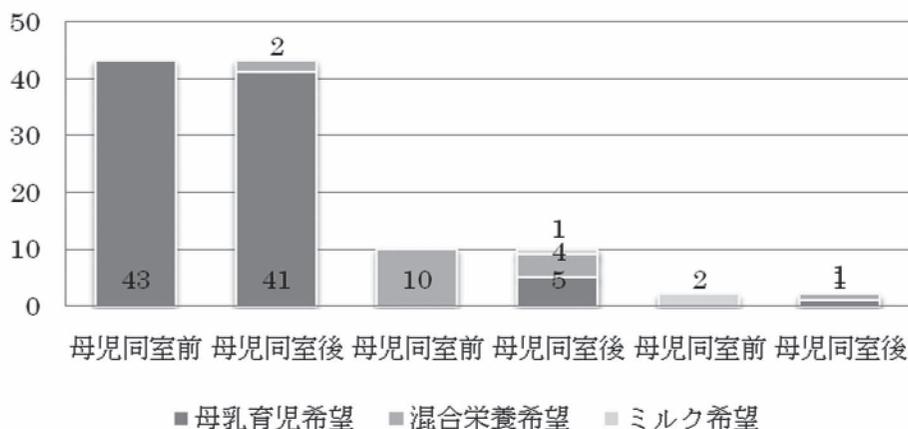


図 5.

(5.5%)であった。不満足と感じている褥婦は「産後の状況を前もって教えてほしかった」というコメントを添えていた。退院時のスタッフの支援の評価は満足・おおよそ満足とする褥婦は52名(94.5%)、普通・やや不満足とする褥婦は3名(5.5%)であった。(図6) やや不満足と感じている褥婦は経産婦であり、第一子は他院出産、日数に応じてミルクを追加していたエピソードがあった。2日目の時点では母乳のみであったが、退院時にはミルク追加となって帰宅していた。

8. 授乳状況の変化

2日目母乳育児を行っている褥婦は46名(83.6%)、退院時母乳育児を行っている褥婦は49名(89%)であった。退院時の際にミルクを補う形で退院した褥婦は5名(9%)いた。(図7)

9. 母子同室制が「悪い」と感じた褥婦5名の内容

退院間近の褥婦5名(9%)は母子同室制に対して「思っていたより悪い」「思っていたよりすごく悪い」と感じていた。悪いと感じている点は

スタッフの支援に対する満足度

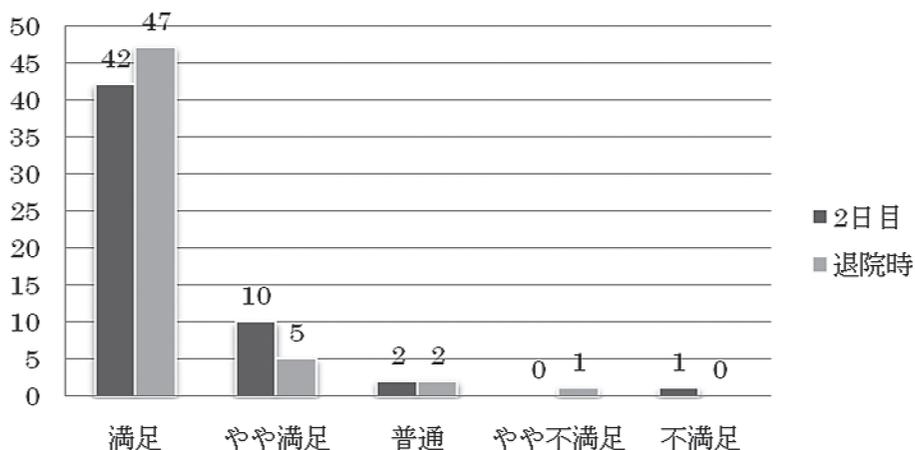


図 6.

授乳状況の変化

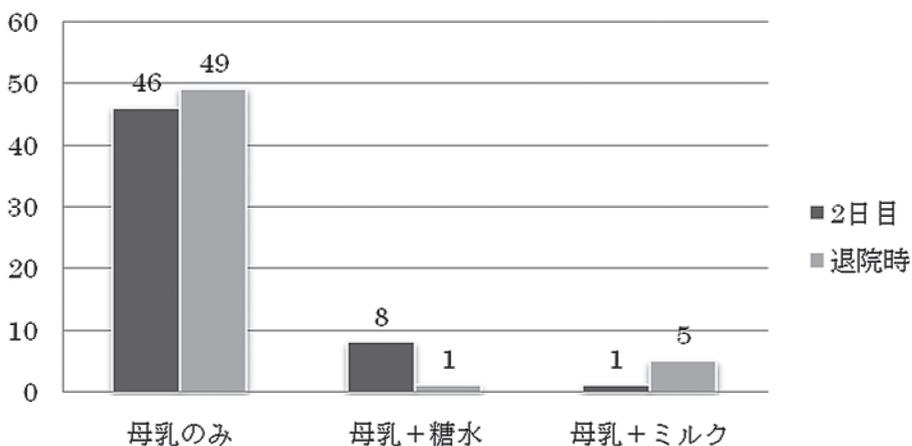


図 7.

「育児の疲れが取れない」が1番で次いで「部屋の環境が悪い」であった。(図8)

10. 不足と感じている「情報」の内容

仙台市立病院における母子同室制の情報は少ないと感じる褥婦は22名(40%), ちょうどよいと思う褥婦が3名(5.5%), 多いと感じている褥婦が30名(54.5%)であった。

情報が少ないと感じる22名の褥婦に搾ってどのような情報が不足しているか抽出すると「母子

同室制であるという事実を明確に伝えること」が1番で次いで「母乳をあげることによって子宮の戻りがよくなること」「母乳分泌がよくなること」「赤ちゃんのサインが読み取れるようになること」が挙げられた。(図9)情報の提供のタイミングは「妊娠中外来で」が最も多く16名(29.0%)「妊娠中の母親学級で」が2名(3.6%)「出生後すぐに」が1名(1.8%)であった。

母子同室制が悪いと感じた褥婦5名 の内容（複数回答可）

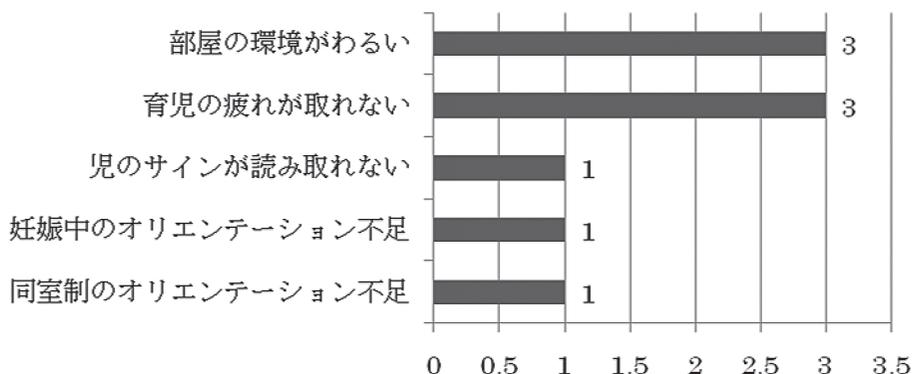


図 8.

褥婦22名が不足していると感じている「情報」（複数回答可）

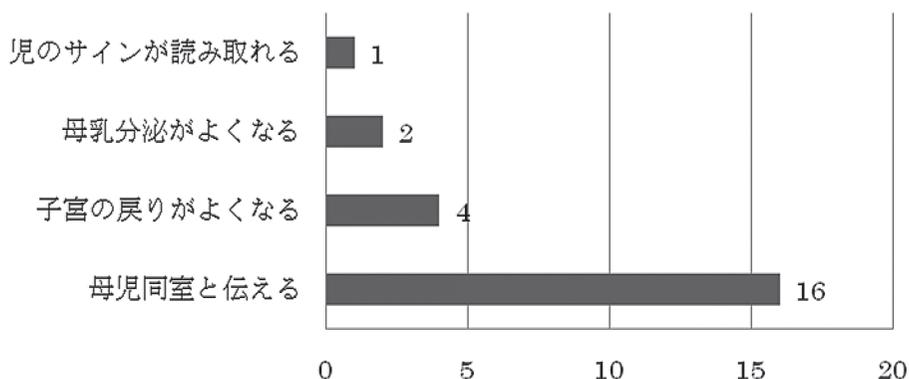


図 9.

11. 母子同室制の必要性

悪い・より悪いと評価した褥婦も含め、全ての褥婦が自分にとって母子同室制は必要であったと感じていた。カテゴリーに分けると「家と同じペースで過ごせるため、退院後の生活に困らない・役立つ」「育児技術が身に付く」「ずっと一緒に入れて嬉しい・幸せ」「母親になったと実感する」「一緒に過ごすことは自然なことである」「辛い辛さに慣れる必要がある」「好きな時に児に触れる

ことができる」「児の些細な変化に気付くことができる」という分類にまとめることができた。

12. 母子同室制と哺乳育児に関する考えの変化

退院時、母子同室制を経て哺乳育児に対する考えが変わった褥婦は40名（72.7%）である。「もともと哺乳育児に興味があったが、母子同室制で哺乳育児が楽しくなり、ぜひ続けたいと思うようになった」が30名（54.5%）、「もともと母乳育

母乳育児への考えの変化

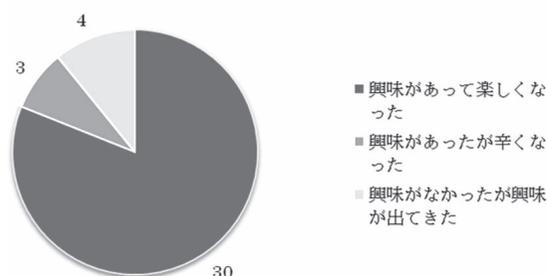


図 10.

児に興味があったが、母子同室制で母乳育児が辛くなった」が3名(5.5%)、「もともと母乳育児に興味があったが、母子同室制のおかげで母乳育児に興味を持つようになった」が4名(7.3%)であった。(図10)他15名(17.3%)は母乳育児に対する気持ちの変化は見られなかった。

考 察

病院側からの母子同室制のアプローチは外来の掲示物と母親学級の4課で触れるのみである。当院はセミオープンシステムの施設でもあり、常に妊婦検診に通院しない為、積極的なアプローチが足りず、母子同室制であることを知らない人が多いのではないかと考えていたが、友人・知人から聞き、インターネットサイトを利用するなど、情報の発信源は把握している以上に広く、その結果として多くの母親が「母子同室制」であるという事実を認識していた。このことから、病院側から受動的に情報を与えられるのではなく、出産という目的達成のために能動的に行動を起こし、情報を得ようとする妊婦がいるということがわかる。ただし、友人・知人やインターネットの口コミサイトなど、噂に乗って広がっていく以上、正確な情報がきちんと伝わっているのかは疑問が残る。また、母親学級を受講しても、母子同室制であると知らなかった褥婦が居るように、スタッフ間において知識レベルを統一することが必須である。一方で「母子同室制は知っている」が「情報が不足している」と感じる褥婦が40%を占め、さらに「母子同室制であると明確に伝えること」が情

報の不足として1番に挙げられるため、母子同室制の内容・メリットを深く理解しないまま分娩に至っていると推測できる。もともと描いていたイメージよりも「より悪い」と感じた褥婦も少数ながら存在することから、母児同室制のイメージ化を浸透させるために知識のより詳細な内容・伝達方法を妊娠中・入院中含めて再考する必要がある。

母子同室制を「悪い」「すごく悪い」と捉えている褥婦はいずれも同室のメリットを3つ以上把握しており、母子同室をスムーズに受け入れる要因として母子同室のメリットを前もって知っているだけでは足りないことが挙げられる。児の状態をみると糖水やミルクを追加しており、直接母乳が確立していない褥婦にその傾向が窺える。これは、直接授乳を頑張っても報われなかった、また産褥期の疲労度等が強く、よいイメージが持てなかったことの表れではないだろうか。また、何らか追加する場合のスタッフの配慮、説明が不足している可能性を示唆するものである。スタッフの支援への評価はおおむね高評価であるが、母乳確立を目指す過程において母子間の関係性が良好となるように温かく見守り、時には意向を尋ね、児を預かるなど、今後も患者側に立った目線で育児支援とエモーションサポートに努める必要がある。

母子同室制の体験は全ての褥婦が自分にとって必要なことであると捉えており、金沢ら⁶⁾は母子同室が「母性育成がより促進される方向にある」と述べているように、母子同室制を経て母親である自覚や自信を持ち、喜びを感じ、自分の生活の一部と捉えていく様子が読み取れた。これは熊井らと同様の研究結果である。母子同室制により、「母乳育児に興味があった褥婦も母乳育児に興味を持ち、続けたいと思うようになった」点からも母子同室制は母乳率上昇に有効であると考えられる。一方で、母乳に興味があった褥婦3名が母子同室により母乳育児が辛くなったと返答していた。退院時は3名いずれも母乳のみであり、退院後の母乳育児の継続に関して不安が残る形となった。この点から、現状以上の個別性のある支援が

看護者に求められていると考えられる。一番辛いとされる母乳分泌までの時期のサポートを密にし、日々変化する体や児の状態を伝え、妊娠中に描いていた母子同室制のギャップの溝を埋めて褥婦1人1人が納得のいくケアを提供していく事が今後の病棟全体の取り組みとして必要である。

結 論

1. 母子同室制であるということは知れ渡っているが内容までは把握されていない。
2. 母子同室制を理解し、受け止めるためには母子同室のメリットを認識していることに加え、母乳育児が順調であるという因子が影響する。
3. 多くの褥婦は現在の育児支援体制に満足しているが、一部の褥婦はより個別性のある支援を求めている。
4. 母子同室制により母性意識は助長され、母乳率上昇に有効であると考えられる。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力いただいた

方々・ご指導いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 熊井陽子 他：母子同室が良い体験となるための検討。第29回日本看護学会論文集。母性看護1998年：59-61, 1999
- 2) 遠藤理恵 他：母子同室制についての意識調査—産前産後アンケート調査結果から—。第35回日本看護学会論文集。母性看護2004年：42-44, 2005
- 3) 宇都宮友里 他：褥婦の母子同室に対する認識調査。第35回日本看護学会論文集。母性看護2004年：39-41, 2005
- 4) WHO 59カ条のお産のケア実践ガイド（戸田律子訳）、農山漁村文化協会、東京、1997
- 5) 五十嵐春美 他：産後検診時における母乳率上昇の因子についての検討。仙台市立病院医誌 29：115-118, 2009
- 6) 金沢浩二 他：母児同室と妊産婦の精神面支援の関連—母児同室と母性育成—。平成6年度厚生省心身障害研究「妊産婦をとりまく諸要因と母子の健康に関する総合研究」：55, 1995